

釣りに釣られて

高原英夫

第九回 「鰈釣りのゴクイ」

青森市には「王余魚沢」と書いて「かれいざわ」と読む地名がある。もともとは合併した浪岡町の一部なのだが、青森市から南へ空港へ向かい、空港を過ぎてすぐの辺りだ。私は県南の出身で全く読めず、ましてや陸奥湾から少し山を越えるような奥まったところに魚の名前があるなど、ただの当て字とばかり思っていた。ところが何かの本で「王余魚」とは、昔、中国の王様が魚の半身を食い残し、川に捨てたら泳ぎだした。それでカレイの別名にこの文字をあてたということを読んだことがある。

そういえば、十年位前、北京の故宮博物館を見て、後門から出て、さあ食事しようということになり、食堂に入った。そうしたら入口の水槽の中にカレイが泳いでいた。じつとみたが、私にはマガレイにしか見えなかった。何か青森と北京というか、中国の歴史が急に近く感じられたことがあった。

その時一緒だった、中国から東京に転勤してきている中国人の石さんが青森に来

ることになり、思い出にと、カレイ釣りをした。四月中頃だったろうか。少し寒く、四人で出かけたが全部で二十匹くらい釣った。石さんは私の指導が悪かったのか三、四匹も釣れただろうか。しかもこの頃はそれでもあたりが微妙で難しい。釣れたカレイはみんな宅急便で送り、東京の中国人の留学生達の宿舍で一緒に食べたという。釣るといふ楽しさと、食べておいしいという喜びが一緒に伝えられたらうか。

さてそのカレイ釣りの話だが、今から十数年前のこと、あまり船にも乗らず、投げ釣りをしていた頃、蟹田の漁港の突端で本当に良い型を何匹もあげたことがある。もともと我々も、そこで大釣りをしているのを見て行ったのだが。それが伝わったのか、場所取り争いとなった。投げ釣りだというのに、深夜の二時にその場に行かないことには釣る場所がない。先端では竿を一人で三本は出すものだから、せいぜい四、五人しか投げれない。うまく早く着いて投げ釣りで二十数匹を上げたりしたが、場所取りやなんやかやで足が遠のいた。他にも夏泊半島の白砂、浦田、稻生等々、あちこちで投げ釣りをして、それなりに満足をしていた。岸壁に斜目に

置き竿をしていると、いきなりザーッと竿が引き去られる。そのまま上げると良いカレイがかかっている。また投げて、ひと仕掛け分だけ引いては止め、また引いて、とクイツ、クイとあたりが来る。合わせてリールを巻き上げる。ゆったりとして、ときめきもある楽しい時間だった。

しかし、いつの頃からか船専門になつてしまった。投げ釣りで十匹とか釣つていれば、家で食べる分には十分だし、遊ぶ費用からしても何も船に乗つてまでも釣るほどのことではないと思つていたのだったが。

はじめは蟹田沖だったが、やがて平内の間木が主な釣り場となった。とにかくよく釣れた。もう十年以上も前の話だろう。

船頭さんは、前日あたりにホタテ作業をしていた場所を頭に入れていた。要は作業で海底に落ちた虫とかのエサが敷かれた状態になつて、カレイがエサ場にしてワンスと集つているのだ。そこヘイソメのエサを落とすのだからわけがない。私は竿を二本持ち、さらに一本を置き竿にして、食いが始まると、こつちのあたりに合わせて上げているうちに、こんどはこつちと、忙しいことおびただしかつた。三十

リッター位のクーラーを満杯にしたことが何度かある。横浜町に行った時は、友人は、仕掛けの針三本に三匹のカレイが何度もかかり、しかも三十センチを超えるのがほとんどで七十数匹も釣ったことがあった。当然クーラーに入りきららず、発泡スチロールの箱をもらい入れて帰った。私も五十匹以上は釣っていた。

ところがである。その後ぱったりと釣れなくなった。平内の場合、その理由のひとつははつきりしている。つまり、ホタテの施設へのかかり釣りが禁止されたことだ。そこが釣れることがわかっていても、自分の施設でないと無断で船をつけられなくなったのだ。

船を停めて、船頭さんから「ヨーシ」という声がかかれば、スルスルと仕掛けを下ろす。しかし、その場が釣れるか釣れないかはすぐわかる。カレイがいればすぐくる。そして船中で「きた、きた」という声が喜々として広まる。しかもそれがひとり数匹は釣れる。そしてピタッと止む。それで場所替えとなる。これを繰り返すのである。もつとも潮の按配で、やっつてすぐにはダメだったが、終わりがけもう一度同じ場に戻りやっつてみたら釣れたということはないことではない。

釣れない日は、移動しても、なにをしても、船で誰か一人に一、二匹で終わってしまう。私は六時間で、手のひら大が二匹ということもあった。最後に船頭さんは私にいった。

「高原さん、どつちに行けばいいべ」

私だつてわからない。適当に「あつち」と指差すと本当に船頭さんは、船を向けた。

かかり釣りから、流し釣りになり、うまくエサ場に行けなくなつてしまったのだ。ただヘリコプターのホバーリングのように流し釣りのように一定の場所に留まつていなければならないのだが。ホタテのロープに囲まれた中で、潮の流れや風を計算し、というのはなかなか難しい。そういう技術を持った船にも乗つたが、一時はそこそこだつたがやはり釣れなくなつて、この長い間乗つていかなかった。そして、三年前からまたやりだした。

ところである、私はこの数年、カレイ釣りに少し自信がある。かつて四十センチを超えるようなマコガレイ、五十センチを超えるイシガレイをあげていて、今は

さっぱりなのに、なんで今頃になってそういうことをいうのかである。というのも四月末ころから七月も半ばまでがカレイのシーズンだとして船に乗るのだが、この二、三年、同じ船に乗った仲間で、何匹釣ったかという話になると、必ず一番か二番になっている。もつとも重さでなくて、数の話なのだが。ある時は三十数人の釣り大会ではこれは重さでの順位だが二番目だった。何か自信めいたものが芽生えている。かつて何十匹などなんでもなかった時はその時でそれなりの自信があつたのだが、それとはちよいと質が違う。

カレイ釣用の仕掛けを見たら、二十個を超えていた。まったくの市販のものもあれば、特に陸奥湾用と書かれているものもあるし、自作のものもある。ビーズも、赤を基調にしたり、青を基調にしたりと様々だ。ただこの二年は二本竿を出すのだが、一本は全く同じ仕掛けを途中で替えもせず使っている。これは実は友人に作ってもらったものだが、形状記憶合金を使い、全体的に青っぽい仕掛けになっている。もう一本は、投げ釣り用のパール系の二本針の仕掛けを作り直し、三本針にしている。そのパールの感じがいいのだ。しかし、自分の仕掛けがいいのかは、時にまっ

たく単純なやつに次々とくるのを見たりするとよくわからなくなる。ただ形状記憶合金は出始めたころから自分でも作っているが、これはカレイの誘いには絶対だと思っている。カレイ釣りには誘いのコヅキが重要だ。食いが立っているときはコヅキさえいらないのだが、とりあえずは五センチくらいオモリをあげて底をたたくのだが、ナイロン製の仕掛けは実は底ではオモリだけは上下しても、エサはベターと底についたままで誘いになっていない。一方の合金製はオモリの動きがそのまま先つちよまで届き、エサも動く。その分だけカレイの気をそそのるのだと思う。だからナイロン製の仕掛けだとしたら、コヅキをもっと大きくしないといけないと思う。私はそうする。

つぎは合わせだ。春の早いころは、ともかくコツコツとあたるが、そのあとがない。コツコツから食い込んでグイと竿先にくるが、これで合わせてはダメなのだ。針まで食い込んでいないのだ。だから合わせたつもりですぐリールを数メートルも巻き上げてしまおうともう次にはこない。二回、三回と待ち、本当に乗ったか十分確認できるほど引き込んだ時に合わせればいいのだ。それでもカレイがかかっている

い時だつてある。だからおお急ぎで巻き上げる必要はない。乗ったと思つたらせいぜい一メートルくらいは竿だけ上げてそれで乗つていけば巻けばいいし、食い込んでいるなければまたそのままゆっくり下げればいい。カレイはまだそこにいてエサを見つめているのだ。だから必ずまたそのカレイはくる。だから一つめのエサを食いつくしても、次がある、というための三本もの針にエサをつけているのだ。その忍耐と、またくるといふ確信、これが今ある自信だと思う。

六月に蟹田でカレイ釣りをした。船頭さんに私の竿を一本渡し釣ってもらつた。みているとやはり合わせが早い。もつと待たなければと思つて見ていた。もちろん何度もうかがつてほどカレイは多くはないし、形も小さくなつてはいるのだが。しかし納得して釣つたカレイにはそれなりの満足感がある。

アブラメでもかかつたかと思うほどの引きをみせるマコガレイ。

繊細なあたりに始まり、強い引き、手持ちの手首にズシツとくる重み、陸奥湾ならではの、これが楽しきなのだ。